2024先生のための夏休み経済教室
「経済の視点で地理の授業を創る」

2024.08.13

福井県美浜町立美浜中学校/兵庫教育大学連合大学院
行壽　浩司（ぎょうじゅ　ひろかず）

経済学習はみんな「苦手」？

- 生徒たちに経済学習についてのイメージを聞いてみると「難しそう」「ニュースとかでやっていてもよく分からない」といった反応である。また教科書の記述も「需要と供給」や「金融政策」といった専門用語が多く、その内容についても経済学の理論を基盤としており、教員は説明中心の授業展開になりがちである。
- そんな生徒、教員にとって「苦手」な印象をもたれがちな経済学習であるが、今まさに現実社会で起こっている事柄と経済学習は密接な関わりがある。
- 具体的な事例（授業ネタ）から経済学習を組み立て、生徒にとって「面白くてよく分かる授業」を目指したい。

なぜキャベツを廃棄しているの？

『どんな資料ですか』　「キャベツを収穫している」

「え？でも収穫したキャベツがないよ」「つぶしているんじゃない？」

『なぜキャベツをトラクターでつぶしているのでしょう』

「失敗したから」「痛んでいたから」「商品にならないから」

『このキャベツは品質は良いのですが、出来すぎてしまったために処分しているのです。』

「え？もったいない」「食べたらいいのに」「どうしてそんなもったいないことをするの？」　→意外な事実から新たな問い

なぜキャベツを廃棄しているの？

- 公民的分野の教科書には、「市場価格」の学習において①『大雪による野菜価格高騰を伝える新聞記事』と②『廃棄処分されるキャベツ』という資料が掲載されている。

- その問いとして（１）①の新聞記事のように、大雪の影響で野菜の価格が高くなる理由を考えましょう。（２）キャベツがとれすぎると②の写真のように、農家の人が廃棄する理由を、価格との関係から考えましょう。

なぜキャベツを廃棄しているの？

- 教育現場で使用されている教科書によっては、市場価格についての記述に際し、トラクターに潰されて廃棄処分されるキャベツの写真資料が掲載されているものがある。
- 大量のキャベツがそのまま市場に出回れば供給量が需要量を上回るため、値崩れを起こして赤字になる。そのため出荷量を調整するためにキャベツを大量に廃棄している事例である。
- この事例は生徒たちにとって意外な事実であり、授業の中で盛り上がりをみせるが、ここからさらに踏み込んで深めたい。

ウソ！ホント？
キャベツ詰め放題千円？！

- 広島県山県郡北広島町にある「芸北ぞうさんカフェ」では2016年に「キャベツ狩り車つめ放題千円」というイベントを行った。
- 車一台当たり千円で、自分の手でキャベツを収穫して自家用車のトランクに詰め込む。50個ごとに追加料金が千円かかるが、それでもキャベツ一玉あたり20円という計算であり、破格である。
- 芸北のキャベツは高冷地キャベツとして品質がよく、広島市内では一玉あたり600円の値が付くこともある。そのキャベツが詰め放題というイベントによって本来廃棄されるはずであった13000個のキャベツが2週間ですべてなくなった。

＊明治図書出版　教育科学『社会科教育』2024年８月号より

ウソ！ホント？　キャベツ詰め放題千円？！

「千円であっても売り上げがあることで利益がある。」

「芸北の野菜のおいしさをアピールする機会にもなる。」

「お客さんが自家用車で現地に来てもらい、自分の手で収穫してもらうことで、輸送費や人件費についてのコストを削減することができている。」

「農場は山奥にあり市内までの輸送が大きなコストであったが、このイベントではお客さんが自家用車でやってきて収穫し持って帰るため、この問題を解決している。」

「『つめ放題千円』という分かりやすいキャッチフレーズは広告の上手な出し方であったといえる。」

＊明治図書出版　教育科学『社会科教育』2024年８月号より

これは公民ネタ？地理ネタ？

- この授業ネタは、13000個のキャベツ大量廃棄というピンチを逆転の発想で解決した事例であるとともに、輸送費や人件費、広告宣伝といった経済学習で学ばせたい内容につながる事例である。この授業ネタを切り口に、様々な学習内容へ派生して学習をすすめたい。
- これは公民のネタである一方で、地理のネタであるともいえる。

→「近郊農業」のように、輸送のコストを克服した事例。

→この方法であれば、消費地から離れた場所であっても利益を出すことができる。

「環境決定論」ではない考え方。

- 去年（2023年夏の経済教室）のまとめ

①地理的分野の授業は経済の視点から捉え直すことで、教科書と現実とのギャップを埋めることができるのではないか。

②今回は「コスト」という視点で、従来までの地理的分野の授業を再構成する試みを行った。

③授業内容の分かりやすさを求めるあまり、環境決定論で授業をしてしまいがちであるが、今後は環境可能論で教材を捉え直すべき。そのフレームワークが「コスト」である。

地理的要因から経済を考える

北海道でバナナを作れない
→熱帯地方で作っているバナナを輸送するコスト
　北海道で作るコスト
（バナナはあしがはやい→エクアドルよりもフィリピン）

環境決定論ではなく環境可能論　経済決定論ではなく経済可能論
経済地理学≒人文地理学　地域経済＝「ミクロ」の視点
経済「マクロ」な視点
地理的事象は経済の視点がないとうまく説明できないのではないか
山形でバナナ　→　地熱「雪バナナ」　→「希少性」「話題性」

さくらんぼ狩り

- 観光客が自家用車で現地まで行く　→輸送費がかからない
- 大人2500円　小学生2200円　園児1000円
- 20分間さくらんぼ食べ放題

＊観光農園どんぐり山（福井県越前市中山町11-1-1）チラシより
写真は発表者撮影

さくらんぼ狩り

- 市街地から離れたところに位置している
- ビニルハウスによりさくらんぼの木とぶどうの木が管理されている。
- 観光客がさくらんぼをとる場所も管理

＊写真は発表者撮影

この教材ネタは「地理」か「公民」か

- 学習指導要領における「地理的な見方・考え方」を働かせる
- 位置や分布「それぞれの農作物はどのあたりで作られているか」

  →地名・目印
- 場所「それぞれの農家があるところはどのようなところか」→周りを見わたすと分かる自然や社会の様子

この教材ネタは「地理」か「公民」か

- 人と自然とのかかわり（人と自然環境との相互依存関係）「人々の生活と自然環境は、互いにどのような影響を与え合っているか」→地形・気候に合わせた人々の工夫は何か
- 地域どうしのつながり（空間的相互依存作用）「そこは、他の場所とどのような関係をもっているか」

→ヒト・モノ・情報の流れ

- 地域「どのような特色があるか」「どのように変化しているか」

→その地域ができる条件・地域の変化

- 位置や分布「それぞれの農作物はどのあたりで作られているか」

→越前市にある金華山で作られている

- 場所「それぞれの農家があるところはどのようなところか」→都市部から離れた山間部　白山スイカも近隣で作られている
- 人と自然とのかかわり（人と自然環境との相互依存関係）「人々の生活と自然環境は、互いにどのような影響を与え合っているか」→春から夏はさくらんぼ、秋はぶどうを作っている
- 地域どうしのつながり（空間的相互依存作用）「そこは、他の場所とどのような関係をもっているか」→観光農園として多くの観光客が自家用車にて訪れる
- 地域「どのような特色があるか」「どのように変化しているか」

→金華山グリーンランドというコテージやバンガローがあり、キャンプ場がある。

- 観光客が自家用車で現地まで行く　→輸送費がかからない
- 収穫は労働か、それとも体験型のレジャーか
  →観光客に自ら収穫してもらうことで収穫のコストを削減
- 木は移動できない　→育てやすい気候条件

「どこでもできるから、ここでもできる」のか、
「どこでもできないが、ここならできる」のか

Ex.香川県のうどん　久々子湖のしじみづくり

まとめ

- 環境決定論ではなく環境可能論
- 経済地理学≒人文地理学
- 地理的事象は経済の視点があるとうまく説明できる
- 「コスト」という経済的な視点で、地理的分野の授業を再構成する
- キャベツ詰め放題1000円、さくらんぼ狩りという具体的な事例から地理の授業を考える
- いちご狩り、スイカ狩り、みかん狩り　との比較
- 「ブルーベリーの生産量日本一は？」「うなぎは浜名湖から〇〇へ」
- 身近な事例から「なぜ」を考える